
神風

愁水

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神風

【Nコード】

N6400Q

【作者名】

愁水

【あらすじ】

これは、とおいとおい昔のものがたり。一人の少女のものがたり。空の上からやってきた、一人の少女のものがたり。

世界を揺るがし、世界を解き明かし、チェス盤を舞台に語られた物語の年代記が紐を解く――。

あなたは、愛する人を奪われたことがありますか……？

第一話「終わりの始まり」(前書き)

原作は友人ですが、好き勝手書かせていただいています。同人誌で出した小説とは異なりますので、「神風」を知っている方、ご注意ください。

第一話「終わりの始まり」

これはとおいとおい昔のものがたり
一人の少女のものがたり
空の上からやってきた
一人の少女のものがたり

夢を見る。

いつも夢を見るのだ。

闇の中を舞い散る白い羽と、その色を汚す赤い液体。
傷つけあい、奪い、失い、泣き、そして――。

私はただ、それを見ている。

手の届かない遠い場所で。

赤い月に照らされ、金色の瞳が私を捉えた。

――
笑った。

彼女はそこで初めて叫んだ。

微風に乗って、鐘の音が聞こえる。

その音が、城下町の教会から聞こえてくるものだわかるのに、
少し時間がかかった。

寝台の正面に鎮座する大時計は、早朝の四時を指していた。
わずかに開いた窓のガラス越しからは、黄昏色の光が差し込んでくる。

彼女は寝台から下りると窓辺に歩み寄り、優美な装飾の施された
窓枠を、音をたてて閉めた。

鐘は連想させる。いつも見るあの夢を。
始まる。鼓膜を叩き続ける鐘の音。

人の仔らの営みが連なり歴史となる。

神の目もたぬ人の仔は、これより起きる異変に自ら気づけなくてはいけない。黒の種子の存在に。

風はないのに、彼女の黄金の髪が揺れた。

世界、アルテミシア。

その創世から現在に至るまで、神々によつて歴史が紡がれてきた。神々が姿を消してから、各地で身近なところに神の存在があり、人々にその恩恵を与えている。

ティアーズ大陸を支配する、ヴィンプフェン。通称「魔術王国」。神話の中では神のみが使えた、と伝えられる奇跡の力「魔術」を与えられた国。この国に遙か昔暮らしていた民族の血を引く者は、受け継ぐ力の強弱はあれど、奇跡の力を使うことが言われている。

——が、今現在、各国で魔術を使える者も増えており、その話が定説となっている確証はない。またこの国の王は、王の子供の中から最も魔力の優れた者を国王に選ぶ伝統があり、魔力が優れていれば女性でも国王になれることが可能なのだ。事実、ヴィンプフェンの歴代の国王は、半数が女性。その影響を受け、他国に比べ女性の社会進出率は非常に高い。性別や家柄でなく、実力を高く評価する流れが強い国なのだ。

物語はこの国から始まる。

神の祝福を受けたと言われる、この華やかなるヴィンプフェンで――。

数えてみれば三日、黒い礫のような雨に降られた。

不気味なほどに広がる暗黒の雲が、すべての青を喰らいつくして

いた。

しかし、久しぶりに晴れ渡った夏の空からは、強く、そして暖かい太陽がキラキラとその輝きを放っている。

誰もがその光に喜びを投げかけている時、現ヴィンプフェン国王イヴラーク・イズルードも、同じ空を見上げていた。輝きに光る彼の髪は、透き通るような乳白色。端正な顔立ちの中に、知性を含んだ深みのある晴天の青の瞳。

彼はふと、執務の手を休め、光が差し込んでいる窓を勢いよく開けた。

途端に青空の匂いと、城の敷地内で咲く花の香りが風に運ばれ、イヴラークの鼻をくすぐる。その匂いを深く吸い込むと、仕事での軽い頭痛が和らいだ気がした。

「むっっ」

最後に両腕で伸びをすればリフレッシュ完了。

「よしっ！午前中にはこの仕事を終わらせなくてはな。今日はコンウェイからの使者も来ることだし……」

そう言うつと羽ペンを手に取り、再び書類とのにらめっこを始めた。ペンで書類を叩きながら思索していると、扉を叩く音と同時に奥から女の声が響いた。

「失礼します、王。ティーナ・サハレイドです」

「ああ、キミか。入れ」

入室を促され入って来たのは、若い女性騎士だった。 > i 179

68—2274<

黒曜石を思わせる絹糸のような黒髪。凜とした氷色の瞳は、彼女の気丈さと美貌を語らせるには強いほど輝いていた。

ヴィンプフェンが所有する白鳳騎士団^{はくほう}。

それは騎士の中の騎士のみが属する、国民達^{みな}の皆が情景を抱く騎士団である。聖誓のもと、主君である王に忠義を。そして国の治安と秩序を守るため国民にも忠義を誓うのだ。

幼き日よりイヴラークと民に忠義を誓った剣の名手、ティーナは

その騎士団の現団長である。

「先日 of 調査報告を申し上げに参上致しました」

直立し、楽器のように響く声で彼女は言った。

「ご苦労だったな。で、どうだった？魔物の痕跡はあったか？」

「…はい。やはり民の噂通り、西のシフの森は魔物の巣窟になっています」

ヴィンプフェン西門を出てヴァルハラ平原を一時間程歩くと、シフの森という太古からの木々が聳える深い森がある。最近その森で人が消えるという噂が、城下の間で広がっていた。やがてその噂は城へと、王であるイヴラークの耳へと届く。実際、何件かの搜索願も騎士団に届き、火のない所に煙はたたないと、イヴラークはティーナにシフの森の調査に向かわせたのだった。

「搜索願で出された三名ですが…特徴的におそらくそうであろうと思われる二名の遺体を発見しました。その他にも三名の遺体が発見されましたが、その…遺体の損傷が激しく、届け出のもう一名の方ですが…身元を確認するのは困難かと…」

「…そうか、残念だ…。結界による森の封鎖は完了しているんだな？」

悲痛な表情を浮かべながら、イヴラークはティーナに確認する。

「はい。フレイが空間結界をはりました。よほどの術者でない限り破ることはできません」

「…ふむ。あの森は西地方の町に行く最短ルートでもある。物資の運搬に使われることも多い。早急な退治が必要だな。…ティーナ、できるか？」

イヴラークの空色の瞳が、ティーナを真っ直ぐとらえる。その鋭い眼差しに臆することなく、彼女は秀麗な笑みを浮かべて言った。

「我が君の民の仇は私の仇。すぐに滅してご覧にいきます」

彼女が扉から出て行ったのを確認した後、イヴラークは短く息を吐き出し、拳で机を叩いた。

「もう少し…、もう少し私が早く対処していれば、五人もの命を失

わせずにすんだものをつ…」

自分の苦悩は他人に見せてはならない。

自分の選択こそ絶対でなくてはならない。

時には非情にならなくてはいいけないと、幼い頃から教育を受けてきた。

「私の民だ。私が、守るのだ」

イヴラークは、自分の心に純粹だった。

大きな姿見に映る自分の姿を、彼はしばらく見つめていた。

——ここは、どこだ？

男の意識が戻る。彼の視界はぼやけていた。

「目が覚めましたか？気分はどうです？」

へろへろとした聞き覚えのある高音が、鉛を埋め込まれたかのような重い頭に鈍く響く。

「もしも…し？…あれ？薬の調合間違えたのかなあ…」

女の一人ごとが聞こえる。何度か瞬きをするとようやく視点が定まり、目の前には淡いルビー色の瞳が顔を覗きこんでいた。

「うつ！？」

条件反射的に上半身を起こした男は、襲ってきた急激な頭痛に顔を歪ませる。

「もう…そんな驚かなくてもいいじゃないですか！ロゼさあん」

ぶう、と頬を膨らませてベッドの脇に立つ女性は、城の魔術研究者として働く魔術師、フレイ・アシュレイン。治癒能力を高めるという紅石が魔法で額に埋め込まれ、濃く輝いている。のんびりとした喋り方とおっとりとした雰囲気が印象的な女性だった。また、掴みどころのないところから妙な噂がたち、何百年も前から歴代の王に仕えているとかいえないとか…。勿論、生き証人がいないため定かではないが。だが、その瞳は星々と同じ、悠久の時を経た静かな光を宿していた。

「今は頭痛がするかもしれませんがすぐに良くなると思いますよ。全く、イヴ様の一杯に付き合ったくらいでこの二日酔いっぷりなんて、ロゼさんて本当に下戸下戸げこげこなんですね。」

「……俺はカエルじゃない」

まるで世界中の不機嫌さを一手に引き受けたかのような、不健康な顔つきで男は言った。痩せているが、そこに脆弱そうな印象はない。その細身は必要な筋力のみをつけ、一切の無駄を削ぎ落とし鍛え抜かれたものだと判る。切れ長の緑玉色の瞳。艶のある漆黒の髪は寝起きで乱れてはいるが、相当の色男である。

白鳳副騎士団長、ロゼ。元はイヴラーク直属の使用人であったが、生まれ持った剣の腕前を評価され、副騎士団長という現在の地位にまでなった。が、極度な酒の弱さは二十三年間生きてきて、全く向上しない。

「あいつの飲む酒は度が強すぎるんだよ。…今何時だ？」

「ええっと、もうすぐ十時半になりますね。」

懐中時計を手に、フレイは部屋のカーテンを勢いよく開けた。空間いっぱい日光が差し込み、開け放たれた窓からは緑風が入り込んでくる。

「きゃわー！ホントに良く晴れましたねー！これだったら明日の魔術大会は開催できそうですー！」

「大会……？ああ、そんな時期か……」 > i 1 7 9 6 9 — 2 2 7 4 <

フレイの言う魔術大会というのは、年に一度、夏に国で開催する娯楽行事で、魔術に長けた者のみが出場を許される大会である。他国からの参加者も多く、高度な魔術師にはヴィンプフェンでの魔術研究者としての地位も約束されている。

「頭痛もひいてきたな……。少し身体を動かしてくるか。…薬、た、助かった。……早く出て行け」

ロゼはすくつと立ち上がると、ぷい、とそっぽを向いた。頬が僅かに紅潮している。フレイはニヤニヤして「いいえ？」と応えた。

「あ、お礼は森葡萄のパフェでお願いします？あーでも木苺のミ

ルフィーユも捨てがたいですね〜！」

「……………」

「やっぱり桃のシャーベットかなあ〜ソフトクリームもいいですね？」

「……………気持ち悪くなってきた」

「———え？大丈夫ですかあ？ケロケロしちゃいます？」

「いや、お前の顔がキモチワルイ。出て行け」

「きやうっ」

ウサギのように後ろ首を持たれ、フレイはぺつ、と部屋から追い出された。

「全く……………」

眉間に皺を寄せて、ロゼは床に落ちていた刺繍のガウンを靴のつま先で蹴り上げた。気づくと、衣服と髪が汗でじつとりと肌に張り付いている。

「着替えてから稽古場に行くか……」

上着を脱いだその時、後ろでドアノブが回る。

「ロゼさ〜ん？お着替え手伝いましろうか〜？ぎやうっ！」

ロゼがスマッシュした枕の顔面直撃で、フレイが大の字に倒れたと同時に扉が閉まった。

王宮を中心に同心円上に広がる街の景観は、整然とした中にも気品が漂い、各地区によつてその住人の階級が異なる。

広大な敷地と無数の別館を持つ王宮「白鳳宮」。ここの住人は王族か高官、そして使用人に限られる。

王宮に最も近い地区、「蒼天区」は上流貴族と呼ばれる者達の居住区である。侯爵、公爵、伯爵、子爵、男爵あたりの爵位を持っていることが条件だろうか。向けられる尊敬や賞賛、時には地位や権力を盾に弱者を苦しめようとする者もいるが、騎士団が厳しく取り締まっているため、被害は少ない。

対する平民、ヴィンプフェンの大部分を占める者達の住む地区は、「硝子区」。多くの家は比較的小じんまりしたものだが、まっとうに生き、働く人々で満ちている。

この「硝子区」に住むレイミは、城で働く魔術研究者として初めて任された騎士団からの任務に、己を鼓舞させていた。…正確には移動方陣が使える魔術師がフレイと主任のカイル、そしてレイミ以外出払っていたため、自分から志願したのだが……。しかしそれでも、憧れの騎士団、それも高潔な女騎士のティーナと共に任務につけるということが、レイミは何よりも嬉しかった。

「えへへ……イイとこ見せなきゃ」

城の敷地内にある魔術研究舎からいそいそと出て来たレイミの視界に、小走りでやってくる一人の女性の姿が映った。

「エミリア!？」

「あ、お姉ちゃん! もう忘れ物だよ!」

レイミと同じ赤毛の女性は、「硝子区」で共に暮らす、血を分けた姉妹だった。両親は既に他界し、二人で生計を立てている。

「あつ、え? あ、コレ忘れてたんだ私! どうりで無いなあと…ありがと! エミリアも仕事あるのにごめんね。時間大丈夫?」

「うん、平気。あ、今日はトッドが来る日だから晩ご飯までには帰って来てね。三人でご飯食べたいし」

そう言うエミリアの左薬指には、控えめだが品のある輝きを放つピンクダイヤの指輪がはめられている。トッドとはエミリアの婚約者で、この指輪は彼からの婚約指輪なのだ。嬉しそうにそれを眺める妹をレイミは愛おしそうに見つめ、にぱつと笑いながら答えた。

「んっ! 頑張って任務終わらせてくるから待って!」

「? 任務…? お姉ちゃん、どこか出かけるの?」

エミリアが小首を傾げる。そんな彼女の尋ね顔に、「聞いて聞いて!」とレイミの頬が更に緩む。

「私、ティーナ騎士団長と一緒に魔物討伐の任にあたることになったの! あの団長とだよ! ? スゴくない! ?」

「！うそっ、ホントに！？」

二人がティーナに憧れるのには理由があった。あれはまだ、レイミが魔術研究者になる前のこと、二人は遠出した帰りに盗賊に襲われたことがあった。それを救ったのが遠征中のティーナだった。それから二人は騎士団というものに更なる関心を得ることになる。

そして研究者となつてレイミが配属された日、ティーナは舎の方へ祝いに来てくれたのだった。「キミのような可能性をあの時救えて、本当によかった。キミ達と共に歩もうとする者のために、これから沢山の人に希望を与えて欲しい」そうレイミに伝えて優しく微笑んだ。

それから城や研究舎の方でレイミを見かけると声をかけ、時には昼食に誘ってくれることもあった。そんな憧れの彼女と任務を共にできる――、レイミにとってこれ以上ない喜びだった。

「いいなあお姉ちゃん……あ、でもティーナ様の足手まといなんかにならないでよ？」

「だっ、大丈夫だよ！………たぶん」

悪戯に笑うエミリアと別れ、レイミは気合いを入れなおすために、ピシッと両手で頬を叩く。

「――よしっ！」

もう少しで集合の時間かな、と、僅かに緊張した面持ちでティーナが待つ城門へ駆けようとした時、

「すみません。少し、お話をよろしいでしょうか――」

気配なく現れた、ローブ姿の女。フードで顔は隠れていたが、この国の人間でないのはわかった。

「……？はい、何でしょう？」

大きな内庭に設置された噴水式の石像、女神像ヴィーナス。像が抱く壺から流れる涼しげな水音は、夏の光を浴び、一層輝きを放っている。

その輝きに負けない無邪気な声が、辺りに響く。

「も〜心配しすぎだよ、レナフ！ちよつと滑って落ちただけじゃない！」

少女が細い手でパンパンと、服についた砂ホコリをはらう。キュツと後ろにきつく縛られた、腰まで届く長い髪は深みのある青い海。「ちよつと落ちたつてレベルじゃなかったですよ！ゴロゴロ転がってたじゃないですか！あれだけヴィーナス像に登ってはいけませんと何度も申し上げたのに……。あまり王と王妃にご心配かけてはいけませんよ、姫様」

「むう…わかつてるもーん（像の上つて水しぶきがあたつて涼しいんだよね…）」

姫と呼ばれた彼女の名は、アビス・イズルード。王イヴラークとその妻、リーフとの一人娘だ。優美で気品ある外見とは裏腹に、性格は気が強く、明るく活発。かつ好奇心の塊のような少女で、彼女の召使いであるレナフは、アビスのとする行動一つ一つにいつもハラハラさせられている。

そんなレナフの心配を余所に、アビスは噴水の水で顔を洗っていた。

「あーさっぱりした！ねえレナフ〜冷たいアップルティー飲みたい。部屋に持つて来て〜」

そのマイペースな言葉にしばし呆氣にとられるが、やがてレナフはくすくすと笑いながら頷いた。

「はいはい。でもその前に汚れたお洋服を取り替えましょうね」

そう言つと、アビスの濡れた顔をタオルで拭つた。

ふと、微風に乗り、どこからか仄かに甘い香りが漂う。

「ん…この香り、この香水…」

キョロキョロと首を振つて周囲を確認し、

「……あ、母様！」

アビスが嬉しさと驚きに青い瞳を輝かせて、その人物を呼んだ。
「あら、見つかったやつたわね」

靴の踵を床のタイルで鳴らし、彼女の周囲で巻き起こった微風が太陽の髪をさらさらと揺らした。

「アビス、あまりレナフに迷惑をかけてはいけませんよ？あと、おてんばもほどほどになさいね」

「……はい、母様」

アビスは頭を撫でられ、とろけそうな笑顔に見とれながら頷いた。イヴラークの妻であり、アビスの母、リーフ・イズルード。女王である彼女は着飾ることも驕おごることもせず、誰に対しても淑やかで優しさに満ちあふれている所が、彼女を一層魅力的にみせていた。

「ねえ母様、私の部屋でお茶しない？レナフがアップルティー淹れてくれるって！あとチェリーパイも」

ちやつかりお茶菓子もつけて、アビスはリーフの腕に手を絡めて言った。その屈託のない笑顔に、リーフは親愛の情を示す微笑を浮かべるが、その笑顔とは裏腹に首を横に振った。

「私もそうしたいけど、これからロゼの所に行かなくてはいけないの」

「え、何で母様がロゼントコに……あ、まさかまた父様がロゼとお酒を？」

父の友人であるロゼの下戸っぷりは、アビスが幼い頃から日常的に目にしていた。それを知っているアビスは察しよくその答えを出す。

「ええ、そうみたいなの。イヴラークは少しだけだと言っているんだけど、ロゼにとつてはそうじゃないでしょう？今頃部屋で寝ていると思うから謝りにね」

「なら私も行くー！からかってやるー！」

ニヤツと悪戯っぽい笑顔を見せ、アビスは廊下を走って行った。

「アビス！走ると危ないですよ！……もう。レナフ、いつも苦労かけますね。すみません」

「とっ、とんでもないですリーフ様！姫様にはいつも元気をいただいているんですよ！」

頭を下げる女王にレナフは慌てて、否定するように手を振る。

「この前だって、城下町にお遊びに出られた時迷子の子供を見つけて、母親が見つかるまでずっと元気づけていらしたんです。本当にお優しく育てて……きっと誰からも愛される女王になれますよ」

レナフはアビスが走り去った廊下を、慈しむように見つめる。

「……ええ。あの子には……あの子だけは、幸せになってほしいわ」
リーフは静かに、だがはつきりとそう答えた。落ちかかった前髪に隠れ、彼女の表情はわからなかった。

……おかしい。

彼女の感覚、全てが囁く。

ティーナはイヴラークの命を受け、供の魔術師の移動方陣でシフの森の魔物を討伐しにやって来ていた。

森に入った瞬間、背中 of 産毛を逆なでられるような感触を受ける。奥に進むたびに濃くなる、常世を思わせる霧。ここに漂う陰気な空気のせいだろうか、虫や鳥の声は全く聞こえない。調査時とは明らかに違う状況に、ティーナは言葉にできない胸騒ぎを感じていた。

「……団長、妖気を読み取りました。近いです」

「ん？あ、ああわかった。皆、気を引き締めて行くぞ」

陰湿な空気のせいか、僅かに震えるレイミの声かけに精神を張らせ、歩を強く踏みしめる。

近づくにつれ、じわりじわりと真綿で首を絞められる感覚。視線に例えるなら、暗闇の中で静かに獲物を狙う捕食者の眼差し。

（何だ、この背筋に絡む寒気は。調査時に感じた妖気とはケタが違うぞ。ヘタをすると上位魔族の上をいく。まさか……いや、そんなハズは……）

突然、弾かれたように森に向かって身構えた。

一瞬で、その雰囲気は重く強く、堅いものになる。

「…来ましたね」

騎士の一人が剣を抜いて構えた。他の騎士も緊張した面持ちで四方を固める。

地の底から聞こえてくるような低く、くぐもった唸り声。それと共に充満してくる、ぬめつ、とした空気。

「レイミ、援護を頼む。皆、死ぬなよ…」

突風に揺さぶられ、木々が踊る。

「来るぞ！」

かつて、ヴィンプフェン白鳳騎士団最強の騎士団長と呼ばれた、アルミニウス・ランバートが稽古師範を務める道場。

城の東に隣接する稽古場は、平騎士が生活する宿舎も同じ敷地内に建てられている。

いつも騎士達の訓練声や話し声で賑やかな稽古場だが、突如現れた二人の女性の存在により、その声はより跳ね上がった。

部屋にいないロゼが稽古場にいることを聞きつけたアビス達は、ロゼを求めて稽古場にやって来ると、訓練中の騎士達の熱ある歓迎を受けた。

「王妃！どうされたんですか！？任務でしたら自分に！」

「今日もお美しいですリーフ様！」

「姫様、今日は稽古ですか？」

「姫様！今度城下に行かれる時は自分をお供に！」

突如、軍隊アリのように押し寄せた騎士達にアビスはたじろぐ。

一方、隣りの母は動じず、にこにこ慣れたように騎士達と挨拶をしている。

（さすが母様…城下に行けばこんなの日常茶飯事だもんね…）

隣りで母の貫録を味わっていると、ふと、視界の片隅に目的の人物が現れた。

「あ！ロゼ！」

アビスの声かけにピクリと反応するが、賑やかな騒ぎを一瞥する
と。

——ボタン。

別の扉から外へ出て行った。

「はあっ！？」

驚きと呆気にとられ、手を振ったアビスの動きが固まる。

（ちよっと何！？今目え合ったよね？え、無視っ！？王女のこと無視っ！？何よ、人がせつかく会いに来たってーのに！）

アビスの口が笑ったように歪む。怒った目元とアンバランスになったその表情に、騎士達は「ひっ」と短い悲鳴をあげる。

「総員っ！！」

突然のアビスの怒号にも似た号令に、その場にいる騎士達は条件反射的に揃えて直立してしまった。

「ロゼ副騎士団長の身柄の確保！突撃！」

ビシッと指された人差し指が、ロゼの出で行った扉を捉える。

しかしアビスの命令に騎士達はお互いの顔色を窺う。意味がわからない、その一色の表情を浮かべたまま。……無理もない。

（え、行った方がいいのか？姫様の命令だもんな……）

（でも何で副騎士団長を？俺ら返り討ちだぞ？やばいだろ）

（姫様の冗談かな？……いや、あの顔つきは違うよな……）

（リーフ様！リーフ様何か仰って下さい！）

一同が助け舟の眼差しをリーフに向ける。その視線に気づき、リーフは女神のような慈愛の微笑みで言った。

「行つてらっしゃい？」

「おつかえり〜！」

約数分後、ロゼが髪を振り乱して、道場の扉を蹴り飛ばして戻ってきた。

「さすがロゼですね。怪我もなくてよかったです」

「王妃……ば、っ、アビスの悪ふざけに付き合うのは止めて下さい」
使用人だった頃、アビスの遊び相手をしていたロゼにはわかって
いた。誰がやったと聞かずとも、こんなくだらない悪戯いたずらをするのは
ただ一人。

「だってロゼが無視するからいけないんじゃないんじゃーん、あんたに用があ
つて来たのに」。だから、おあいこおあいこ？ね？」

「お前…外に転がっている奴らにも同じこと言えるか？悪戯に兵を
使うな、この馬鹿」

リーフには何とか言いとどまったが、遊び相手だった頃のクセな
のだろうが、一国の王女を「馬鹿」呼ばわりしてしまうのがロゼは
未だに抜けないでいた。今のも無意識の内の言葉である。

「——それで、王妃のご用件とは？酒の件でしたらこのように回
復しております。ご心配なく」

何度繰り返したであろうこの光景に、ロゼは覚え慣れた台詞を淡
々と吐き出していく。

「本当にごめんなさいね。でもあの人、信用した人しかお酒を飲
まないのよ？これに懲りず、これからも仲良くしてあげてね」

「……わかっています」

諦めたようにロゼは微笑した。彼が心底嫌がっていないことはリ
ーフもわかっている。ロゼも自覚しているためいつもこのような会
話で終わるのだが、かと言ってロゼの二日酔いが慣れることはない
……。

「そういえばロゼ、今日はティーナと一緒にじゃなかったんだね。稽
古する時はいつも彼女と組むのに」

「あ？……ああ。俺もさつき知ったんだが、魔物討伐の任に出かけ
られたらしい。シフの森だそうだ」

アビスの問いに、やや不服そうにロゼは答える。恐らく自分も同
行したかったのだろう、僅かではあるが子供のように素直な不満を
見せるロゼを、アビスは少し可愛らしいと思った。

「その任務なら私も聞いているけれど、朝には出かけたはずよ？いつもなら帰って来ていてもおかしくないはずだわ。ティーナ、大丈夫かしら……」

少し強張った表情で、リーフが心配げな声で言う。

彼女の実力は、ロゼが騎士団に入る前から耳にしていた。恐怖を知らない戦いぶりでその名を知られる「死霊のティーナ」。その異名は伊達ではない。そんな彼女の強さを知っているからこそその、リーフの不安。

背筋を駆けめぐる、奇妙な感覚。

「不確か」な不安が襲うまで、時間はかからなかった。

「…失礼します、王妃」

「ちょ、ちよつと待つてよロゼ！」

制止するアビスなどお構いなく、ロゼのつま先は道場の外へと向けられていた。

「イヴ様の許可なく騎士団長、副騎士団長の不在は認められませんよーロゼさん」

その声はいきなり三人の耳に響いた。

いつの間に現れたのだろう、音もなくロゼの前に立っていたのは、にこにこ優しい笑顔を決やさないフレイだった。

「…どけ。イヴラークの許可をとれば文句はないのだろう」

ロゼの目が、憎々しげに細められる。フレイの言っていることが正論な故に、すぐさま出発したいロゼにとっての精一杯の皮肉だった。

「それにはご心配なくー！私がティーナさん達をお迎えに行つて来ます？ロゼさん、移動方陣使えないでしょ？」

「なっ！魔術師が一人行つたところで――」

「それでも魔術を使いこなす力はイヴ様に続く、王国？2と言われているんですよ。ご安心下さいー！」

ロゼの鋭い眼光を平然と受けとめて、フレイはきゃっきやと笑い声をあげた。天然故の鈍さなのか、それとも大物なのか。

「待つてフレイ！私も行く！ねえ母様いいでしょ？私だつてティーナのこと心配だもん！」

アビスはリーフの袖を掴むと、澄んだ海の青色の瞳で見つめた。生半可な気持ちで、言葉を口にしたのではないのはわかる。胸が騒ぐのはリーフも同じだ。ただ、アビスは騎士でもなければ正当な魔術師でもない。幼い頃から騎士団を見て学んだ槍術はなかなかのものだと言われているが、所詮見よう見真似。そんな我が子を危険な場所へとリーフが悩んでいると、途端にガツシリと両肩を力強く掴まれる。

「私を信じて母様。絶対に大丈夫だから。ね？」

そう言ったアビスは、真っ直ぐ母の銀色の瞳を見つめて微笑んだ。
『信じて母様』

その短い言葉が、絶対的な呪文のように感じた。

「……………わかりましたアビス。気をつけて、行ってらっしゃい」

滑らかな、低くて優しい声で告げた。

「ご心配なく。姫様は私が命にかえてもお守りしますから。では、さくつと行って来よう！ロゼさん、いい子にお留守番してるんですよ！」

一言余計に言葉を述べ終わると、二人はフレイの発動した移動方陣でシフの森へと消えて行った。

「…………アビスを行かせてよかったんですか？過保護な父親が知れば面倒ですよ」

「あら、心配してくれるのね。ありがとう。ふふ、でもロゼだつて

…………

「…………？」

にこりと笑つてリーフは感謝すると、ロゼの目を暫く見た後、静かに話しを続けた。

「ティーナとあなたが初めて出会った時のことを思い出すと、彼女の心配をするあなたなんて想像もできなかったわ。ふふふ…………あなたに「人を信じる心」を教えてくれた大事な人ですもんね」

「あの時」の、ティーナの言葉が口ゼの脳裏に鮮明に蘇る。

「…………。今でも、時々思い出しますよ。彼女がいなければ、俺はイヴラークを――」

その先の言葉を、彼は紡ぐことはなかった。

――紡ぐことが、恐ろしかった。

死の匂いを間近に感じている時のような、嫌な感触。

胸を挟る血生臭い空気が、自らの肩から溢れ出している。

「団長！出血がっ――」

「私のことは気にするな。それより二人の治癒呪文に集中しろ。手遅れになるぞ」

レイミの膝元に倒れる騎士達は、自らが流す血溜まりに身体を埋めていた。未だ塞がらない傷口を見ると、かなりの量の血液が流れ出ている。一人は胸部の肉を挟られているほどだ。激痛に顔を歪ませながらも、死ぬまいと必死に呼吸をしている。

ティーナの他、剣を構える二人の騎士も無傷ではなかった。服を濡らす鮮血が、地面へと落ちる。

「ぐ…調査ミスだ…。これほどの、これほどの妖気を持つ魔獣ヘルハウンドは見たことがない…！」

今、目の前にいる魔物の存在がもたらす衝撃は別格だった。漆黒の体毛に包まれた巨躯、狂気に濡れた赤い眼と獲物を切り裂く長い牙。そして、先程受けた肩の一撃の凄まじさ。だが、ヘルハウンドと呼ばれる魔界の狼は、普通の狼と同じくらいの大きさ、凶暴性も並以下である。異常に巨大化したその身体は、人一人を呑み込むほどだ。

――瞬間。

ヘルハウンドの影が、ぞわりと動く。

「！？」

すんでの所でティーナはそれに気づいた。喉笛を噛み裂かれようとされる騎士の腕を、勢いよく引く。

ヘルハウンドは唸りをあげて木々に突っ込んだ。

「あつ…あ、ありが、とうございます、団長…」

助けられた、と言うより、彼には何が起こったのかわからなかった。常人では目で追うことなどできなかっただろう。その様子を、もう一人の騎士も呆然と見つめていた。そしてガクリと、膝を落とす。

「無理だ……こんな、こんな魔物をこの人数で倒すなんて……！」

震える声で騎士が叫んだ。身体を起こしたヘルハウンドは、絶望をあらわにする騎士へとゆっくり距離を詰める。

「ひっ」

魔物の爪が騎士の身体を捉えた。

その時、剣光が走り、短い悲鳴をあげたヘルハウンドの右腕から、ぱつと赤いものが飛び散る。と、同時に、斬り裂いた傷口は漆黒の炎で燃え上がった。

「ギアアツ！」

傷口を焼かれる痛みに、ヘルハウンドは首を振り乱し苦しむ。

「こ、これ、は……鬼^{きこくえん}哭炎……」

驚愕に見開かれた目で、騎士は剣技の名を呟いた。魔物の後ろには、肩の傷などものともしないティーナが技を放った後の体勢で構えていた。今の攻撃で開いた傷口から、ぼたぼたと血が流れる。だが毅然とした表情で、怒りで渗む赤黒い瞳と対峙していた。

「あ……だ、団長、俺……」

だらしなく地面に腰を抜かしている騎士は、血色の薄い表情でティーナを見た。彼女は魔物から目を離さず、静かに言う。

「心に恐怖が入り込むのは恥ではない。だが騎士として忠義を誓った身なら、死など自ら受け入れるな。それは愚者のすることだ」

一度言葉を句切ると、微笑した彼女は独り言のように言った。

「誰も死なせない。「死霊」の名、こんな所で朽ちらせん」

ティーナは意を決し、剣を握り締める。

すると――。そんなティーナを嘲笑うかのように、

カッ……カカカ……

魔物は不気味な声で「笑った」。

実際、笑っているのかどうかはわからない。少なくとも、ティーナにはそう感じとれた。

（何だ…こいつは）

やがて、不気味な笑い声が止み、

「……ア……アノオンナの、いったトオ、リだ……」

代わりに、低く、くぐもった声が聞こえた。人間と同じように、顎を上下させて喋っているのだ。

ごくり。ティーナの喉が勝手に鳴る。驚愕を隠せないのは、その場にいる全員も同じだった。

戸惑いながらも、ティーナは不明瞭な発音の意味は聞き取ることができた。

「あの女の言ったとおり、だと？ 貴様、上位魔族やダークエルフでもないのに何故喋れる！？ その変異した姿も、何か関係があるのか！？」

彼女の問いかけに、ヘルハウンドは一步、前へ出た。

カカカ…！カカカ！

人間そのものを嘲笑うかの如く。魔物はまた赤い口を開け、笑う。

「へんい…チガウ、アノオンナはしんカ、ト、いった。キ、きんいるノめ……あ、アイつは、るしファー、ダ」

「…ルシ、ファー…？」

――次の瞬間。

ブワッ！

ヘルハウンドの巨体が舞っていた。一瞬でティーナ達の遙か上空へ跳躍する。

「！」

咄嗟にティーナは後方へ跳ぶ。同時に、さっきまで彼女が立って

いた場所で重い音が響き、大量の砂塵が舞い上がった。ティーナは更に後退し、間合いを取る。

濛々^{もうもう}と舞い上がる砂塵の中。

「アノオンナ、の、イッタ、とオリ……」

低く呟く声が聞こえる。

「……な」

どういう意味だと、声をあげたその時――。

砂塵の中から、まさに一瞬。瞬きする間もなく、文字通り刹那であつた。ヘルハウンドの長い尾がティーナの頬を掠めたかと思うと、その細い首に絡んでいた。

「ぐう！」

「――団長！」

ティーナの危機に反射的に斬撃をしかけた騎士達だったが、突風のように払った魔物の太い腕が、彼らを強烈に打ち据える。反応できなかった騎士達は一撃で跳ね飛ばされ、木に激突して昏倒した。首に絡んだ尾は、ティーナの喉に食いついて声を出すことができない。締め上げられる音が、骨伝導して鼓膜に響く。

鋭い牙を剥き出しにしながら、魔物はゆっくりとティーナに近づいて来た。――笑っていた。

「……い、つたとおり……。くろ、イかみとアオイ、めノオンナ……。おまえダ……。おまえコロセ、バ、もっトしん力させテ、くれル。……。力カ、力カカツ……！」

ごっつ、と空気が鳴る。

唐突に魔物の握力から解放され、ティーナは思わず尻もちをついた。

ずるり、と脇に落ちたのは、斬り離された魔物の尾。首をさすり、咳きこみながらティーナは頭上を見る。

瞳に狂気をはらみ、魔物が憎々しく睨んでいた先には――。

「よかった！ 間一髪！ 大丈夫だった？ ティーナ」

自分の身体ほどもあるであろう槍を軽々と構え、この場に似つか

わしくない無邪気な笑顔で言ったのは、一国の姫、アビスだった。

「なっ…姫様!？」

ティーナは驚愕を示しながら、素早く身体を起こす。

「興味深いですね。ヘルハウンドが喋れるほどの知能を持つなんて、初めての例ですよ。」

「フレイまで…何故」

「ティーナさん達のお帰りが遅いので、心配で来ちゃいました。」
とりあえずお話は後です。じっとしていて下さい」

フレイはティーナの傍に寄ると、そっと何かを呟いた。すると彼女の足元に魔方阵が現れ、ティーナの肩の傷を癒していく。

「出血が酷かったのに、ずいぶん無理をされたみたいですね。これでは実力の半分も出せないですよ。この傷だって、他の方を庇って負ったんでしょう?」

「——っ。それは……」

「はい、治りました。ではサツサと退治してしましましょう! 姫様、遊んでないでそろそろここにきて下さい! 巻き込んだじゃないですよ。」

フレイが呑気に呼びかけた先では、アビスが魔物の鋭い爪の猛攻を器用に避けている様があった。所々繰り出される彼女の槍の攻撃は、ヘルハウンドの急所を正確に決っていた。

額にうつすらと滲んだ汗を服の袖で拭きとりながら、アビスはフレイの呼びかけにウインクで合図し、魔物から大きく距離をとる。

同時に、フレイが唱えた魔法が炸裂した。紅蓮に輝く球体が魔物を包み込み、凄まじい高熱と閃光を発生させ、ヘルハウンドの肉体を焼き焦がしていく。フレイが得意とする火の魔法。ヘルファイアである。

「ギャアアッ!」

魔物は苦しみの咆哮をあげながら、凄まじい速さでこちらへ突進して来る。目標をティーナに定め、彼女を掴もうと前足を伸ばした。しかし、その巨大な前足は空を掴んだのみ。

「滅べ」

ティーナの怒りをこめた呟き。まるで彼女の幻影に突っ込んですり抜けたかのごとく、一步、二歩、骨格を失ったかのように突如、がくりと膝をついた。

（剣聖・無明…すごい、初めて見た）

アビスの目で、やっと追える一閃だった。ティーナが抜き打ちに、ヘルハウンドの腹部を斬り上げた。

僅かな動きで魔物の突進をかわし、低い構えでの一閃であった。どろり、と魔物の引き裂かれた腹から、大量の血と臓物がこぼれ出る。

断末魔の叫びの代わりに魔法で焼かれる身体が激しく燃え上がり、次の瞬間には地面に焦げた痕だけを残して、ヘルハウンドは消滅した。

「任務、完了…だな」

ティーナは静かに呟く。

「お見事ですティーナさん。レイミさんが治癒されていた二人は無事みたいですよ。気絶している騎士の方々も命に別状はありません」
魔物に吹き飛ばされた騎士の傷を癒しながら、フレイが言った。

「そうか、よかった…。助太刀ありがとうフレイ。姫様もお怪我はありませんでしたか？」

「ん、大丈夫！皆無事でよかったね」

この瞬間、木々の隙間から差し込む太陽の光を、この森に来て初めて浴びたような気がした。澄みきった青空が緑の間から覗く。

その光を眩しそうに見上げてから、フレイは召喚した杖を地面に軽く叩いた。

「では城に戻りましょうか。リーフ様が心配されていましたよ。あ、ロゼさんもすごく心配していました。後、ちょっと勘ねていました」

「ふふふ。二日酔いの騎士なんか連れて行けないだろう。あいつも結構、子供なんだよ」

フレイとティーナは声をたてて笑った。

移動方陣で全員を城に送ると、フレイはヘルハウンドが消滅した場に目を向ける。

変異したヘルハウンド。

その変異を促したとされる「ルシファー」。

何者かが自然の摂理を拒否し、捻じ曲げようとしている。

「何かが始まる……いえ、もう始まっている」

自然と口から言葉がこぼれた。

フレイが呪文で空間結界を解き、方陣の光が消える。

それを見計らったかのように、突如現れた闇が一人の姿を形成した。

その瞳の色は——……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6400q/>

神風

2011年2月16日16時10分発行